

# これからの医学英語教育を考える<sup>i</sup>

森岡 伸

On Medical English Education

Shin Morioka

## 1 はじめに

＜敵を知り己を知れば百戦危うからず＞というコトバがある。孫子の兵法である。いささか場違いに聞こえるかもしれないがこれが英語教育についても言える、というのが私の感じるところであり、今回の話のキッカケでもある。もっと戦略性を意識した視点から医学英語教育について考えてみたかったし、それも必要な筈だと常々思っていた。すなわちこの場合の「敵」（不穏当なら「相手」と置き換えても良い）、要するに学習対象となる「英語」とはどのような地政学的意味を持った言語か、どこから来てどこへ向かっているのか、その国際的、文明史的位置づけの＜今＞はどうなっているのか、である。一方ここでの「己」とは、当然ながら英語学習の主体である側、すなわち我々日本人のことである。「医学生」を想定しているが、日本人とは何か、とりわけ学習者という文脈で位置づけられた我々を取り巻く諸条件であり、日本人の心的特質までそこには含められるべきだろう。従って「敵」と「己」、すなわち「相手」と「自分」という、この二つの軸の相関の内にこれからの医学英語教育の姿が展望されるべきという前提で、そこに見えてくる一端について話したいと思う。ただ、ここであらかじめお断りしておかねばならないのはこのテーマの本来の射程はとてつもなく大きい。恐らく大部の書物一冊を費やしても扱いきれないような大テーマである。それを本来アカデミックな論文を掲載すべき「紀要」の限られたスペースを借りて語ろうというのだから、はなから無茶でもあり乱暴なことかもしれない。しかし今回はそれを承知の上で、新聞投書欄への投稿者気分宜しく気儘に自分の想いを述べようと思った。参考文献も「肩の凝らない」一般的な読み物まで遠慮なく入れてある。時に数字や表を並べて一見学術風を気取ってもいるが、全体の印象としてはまず「エッセイ」「お話し」というところだろう。期

待される「論文」の趣からは遠いかもしれない。ご容赦頂ければ幸いである。

### (1)

まず以下の円形グラフから始めたい。これも大事な知るべき「己」の一部である。本学の医学部2学年、3学年、4学年にかけて（27年度専門教育シラバスから）の延べ70科目のテキストを調べた結果である（図.1）。何を調べたのか？使用テキストが英語テキストか否かの物差しをあててそれを数字にした。「黒」＝日本語テキスト（42）、「白」＝特にテキスト無し（22）、「網がけ」＝英語テキスト（8）、「斜線」＝翻訳もの（6）を表示。ある一面がここから窺える。

断然「黒」の日本語テキストが多い（42点）。翻訳ものを含めると更にはっきりそう言えよう。英語テキストはというと全体のほぼ1割程度（8点）である。これをどう受け止めるかである。（ちなみに10年ほど前に興味をもってこの角度から同シラバスを調べてみたところ結果はほぼ同じであったことを言い添えておく。）改めて言われなくてもこれらの「事実」は認識している、という本学の諸兄は多いだろう。しかしその意味を英語学習との関連で考えた向きはそう多くないので

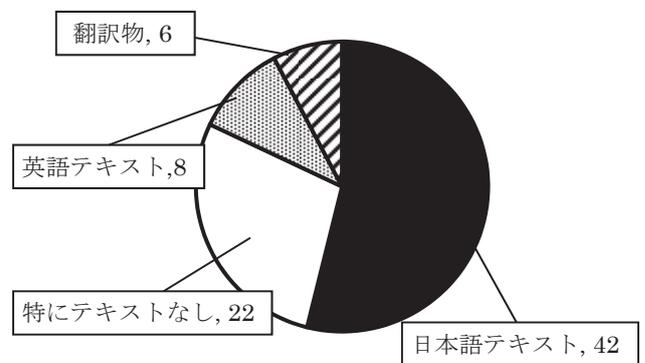


図.1 本学医学部2学年、3学年、4学年講義資料テキスト

はないか。日本の大学でもあるわけだし日本語のテキストで何の不思議があるのか、という声もあるかもしれない。しかし〈医学言語＝英語〉という現実がこの世界でほぼ定着しているなかで、この数字はある面意外でもある。実際身近な比較で言えば東、南アジア諸国の医学教育テキストは殆どと言って良いほど英語だ。日本の医学部（他学部でもある程度そうだが）ではなぜそうならないのか。答えは多分以下の2点につきる。

- \* ほぼ日本語で間に合うという当たり前の現実。
- \* （補足するなら、）それだけ日本の医学レベルが高くもあり、同時にそれを支える日本語のもつ翻訳力の高さ。

今述べた様に東、南アジアの殆どの国は高等教育、医学教育は英語である。勿論それなりの背景はある。英米圏の植民地を経験した国々は宗主国の言語での教育を受け入れてきた。教育制度も含めて使用言語そのものについても、その受容は否応のないものだった。また別な事情で英語を受け入れている国もある。それも含めて医学教育言語について少し具体例を見ると表1の通りである。

シンガポール、インド、マレーシアはご承知の様にイギリスの旧植民地である。インドネシアはかつてオランダの植民地だが、その後の日本の一時的支配など様々な事情もあってオランダの影響は限定的だった。多民族、多言語国家である。インドネシア語があるが、統一した高等教育言語としては英語である。タイは植民地支配の経験はなくてタイ語が公用語だが、近

代化の問題と絡んでやはり高等教育をすべて自国語で賄うのは難しいため、広く英語が使われている。では中国や韓国はどうだろう。医学教育はそれぞれ公用語の中国語、ハングルである程度行われている。中国語の場合はご承知の様に中国文字すなわち漢字のみである。日本のように漢字、カタカナやひらがなの多様性があるわけではない。従って欧米からの先進学術概念の翻訳となればすべて漢字に置き換えてゆかねばならない。その労力たるや膨大である、とだけ言うておこう。韓国はどうか。昔は漢字とハングル混合の時代が続いたが40年以上前から公式には漢字を排除した言語政策をとっている。これには賛否もあるようだ。ハングルは表音文字であり、漢字使用時代に培った概念をこれで置き換えるとなると同音異義語もぞろぞろ出てきて分かりづらい。高度で、複雑な（西洋）医学概念を翻訳するとなるといささか不便である。どうしても手っ取り早く直接英語に向かってしまう傾向があるという。<sup>ii</sup> 日本語の場合は漢字、ひらがな、カタカナの三つを巧みに組み合わせて先進的な学術概念を日本語に移してきた。「移してきた」というと、いかにも左にあるものを右に移動しただけのように聞こえる。しかし苦勞を重ねながら150年に渡って翻訳力を磨いてきたのが日本近代の歴史である。そして今は英語世界の学術概念が漢字だけでなくカタカナを通して大量に日本語へ移し入れられているのも確か。中には学術英語をカタカナに移しかえる労を省きそのままアルファベットの頭文字で使っているケースも多いようだ

さて上記でも触れた国々のような場合、高等教育言語に「英語」を使うということは、当然ながら「まるご

表1 アジア各国の英語教育事情

国名	使用公用言語	医学教育言語	備考
シンガポール	* 英語 * マレー語 * 標準中国語 * ヒンズー語	* 英語	多言語社会 (旧英国植民地)
インド	* ヒンズー語 * 英語 (準公用語)	* 英語	多言語社会 (旧英国植民地)
インドネシア	* インドネシア語	* 英語	多言語社会 (旧オランダ植民地)
マレーシア	* マレー語 * 英語 (準公用語)	* 英語	多言語社会 (旧英国植民地)
韓国	* ハングル	* ハングル * 英語	日本統治時代あり
タイ	* タイ語	* ほぼ英語	
中国	* 中国語	* 中国語 * 英語	西医はほぼ英語テキスト

これからの医学英語教育を考える

と英語」での学習ということになる。英語(で)講義が行われ、学生も英語(で)考え、発表、ディスカッション、レポート作成までも、総合的に英語に晒されることを意味する。当然英語力も上がる。<sup>iii</sup>

以下それを頭に入れながら TOEFL の国別成績の一覧を見てみよう。(表 2) 概ね成績は今言った背景と符号しているのがわかる

1 位シンガポールから 6 位バングラディッシュまで見事にそろって英米の旧植民地である。インドネシアは違うが既に述べたように、高等教育言語は英語である。繰り返すなら、このように英語で学ばざるを得な

い歴史的事情や教育環境の中に置かれていれば、ある程度高い英語力が結果としてついてくるのは不思議ではない。そのことをこの表は裏付けてもいる。続けて、中、韓、台、シンガポール、モンゴルを 2005～2014 年のトーフル平均点で日本と比較した資料がある。以下見てほしい。(図 2)

日本、モンゴルは低い。大きな差ではないが日本は台湾、韓国、中国の下である。何年か前に「中日新聞」のコラムに名古屋大学のある教授の発言が掲載されていた。台湾の幾つかの大学でナノテクの講義した体験をもとに台湾、韓国、中国学生の英語力の高さを強調

表 2 TOEFL スコアアジア国別ランキング (2014)  
Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Tests (2014) より作表

		Reading	Listening	Speaking	Writing	Total
1	シンガポール	24	25	24	25	98
2	インド	22	23	23	23	91
3	パキスタン	21	22	24	23	90
4	フィリピン	21	22	24	22	89
5	マレーシア	22	22	21	23	88
6	バングラディッシュ	20	21	21	22	84
"	インドネシア	20	21	22	21	84
"	韓国	22	21	20	21	84
"	スリランカ	20	21	22	21	84
"	香港	20	21	21	22	84
11	北朝鮮	21	20	20	21	82
12	カザフスタン	18	20	22	20	80
"	台湾	20	20	20	20	80
14	ネパール	18	19	20	21	78
"	ベトナム	19	19	19	21	78
16	ミャンマー	18	19	20	20	77
"	アゼルバイジャン	18	19	21	20	77
"	ブータン	17	18	22	21	77
"	中国	20	18	19	20	77
"	ウズベキスタン	18	19	21	19	77
21	キルギスタン	17	19	21	19	76
22	タイ	18	19	19	19	74
23	トルクメニスタン	16	19	20	18	73
24	マカオ	17	17	18	19	72
"	モンゴル	17	18	19	18	72
26	タジキスタン	15	17	20	18	71
27	日本	18	17	17	18	70
28	アフガニスタン	14	16	21	18	69
"	カンボジア	15	16	19	19	69
30	ラオス	13	15	18	18	64

しながら、それに比べてわが日本人学生の英語力の低さを強調されていた。<sup>iv</sup>これはアジア諸国の学生、研究者との交流経験のある方なら共感をもって受け止められよう。この先生の「体感」も上記トールフルのデータの内容とは矛盾しない。中、韓、台はいずれも英米の植民地経験があるわけではない。しかし、話せば長くなるテーマだがこれらの国では学問の「近代化」の問題プラス「言語の翻訳力」の事情も絡んで、高等教育においては日本よりはるかに英語は「切実な」学習媒体言語となっている。

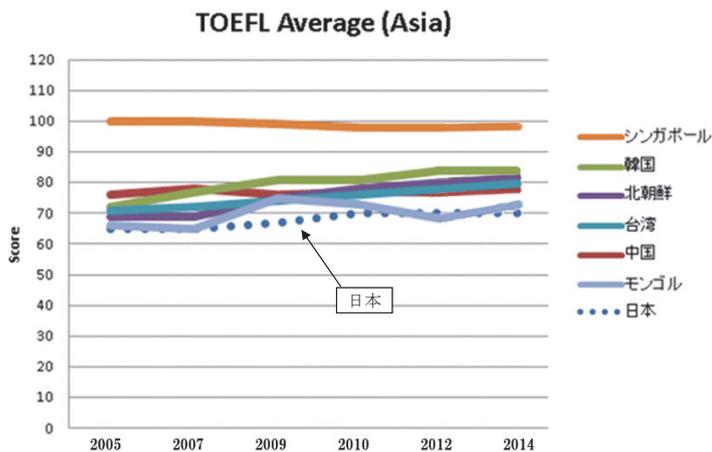


図.2 アジアの TOEFL 平均点

## (2)

日本は日本語でかなりの部分医学を賄えるという一種の「強み」を持っている。医学生を見ているとこの点は随分恵まれていると思う。英語に全面的におんぶするのではなく、おもなテキストは慣れ親しんだ日本語（翻訳も含め）で勉強できるのだから。それは確かに有り難いことである。しかしトータルな英語力を身に着けるといふ観点に立てばこれは一種のジレンマかもしれない。つまり最先端の学問内容のかなりがすでに日本語化されている。従って英語の「切実さ」が必ずしも差し迫った必要性をもって彼らに届いていない。恐らく、英語の不得意を自認するような学生の多くも決定的な「不便」を経験することなく卒業してゆくのではないか。英語が重要であることは認めつつもそれほど大切な「武器」として自覚出来てない、と私などには見えるのだ。であれば英語を使える学生が増えてこないのも無理もない。そんな現状を前にして英語の得意な MD の先生からは時々次のような意見を耳にする。要するに「日本の医学教育は全部英語でやれば良い。日本人教員も英語（で）講義する。そうすれば自然に学生も英語になれば英語力も上がる。」時々聞えてくる意見

である。最近も某大学の基礎系のある教授の似たような発言がネット上のブログに載っていた。一理あるように聞こえる内容だが、しかしこれは多分うまく行かない。（もちろん限定された範囲でなら実践可能だし、そのようなケースも実際あるようだ。）繰り返すがなにせ立派な日本語のテキストが手元にあって、そして当然のことだが教員も学生も日本語の方がずっと得意である。他の分野もさして事情は変わらないが医学の場合、専門課程で教える側は日本人教員が大部分だから当然英語でイマージョン教育を受けてきた人は少ない。となればテキストを含めて英語で講義する必然性と有効性は経済効率的に見てもどうしても高くはならない。ここで日本語を悪者にしても仕方がない。私が強調したいのは、見方によっては二律背反のジレンマかもしれない現状を踏まえた上で何が出来るか、ということ。日本語で医学を学べる強みは強みとして認めながら、医学生の英語への情熱（切実感）をもう少し引き上げ、それを実際の英語力の向上に繋げる手立てはないのかということである。

本学のみならず医科系大学では 1, 2 学年でかなり、さらに 3, 4 学年の一部でも「医学英語」(を) 勉強している。既に相当な時間数である。調べた範囲では大学間の実情は似たりよったりと言って良い。1, 2 学年の教養教育の枠組みの中では日本人英語教員、あるいはネイティブの英語教員がかなりの時間をそこで受け持っている。専門教育の枠外である。そしてこの英語時間をさらに増やすのは容易ではあるまい。人的経費もかかる。全学的に余程の英語好き教授がそろった大学ならば別だが、仮にももしそんな提案をすれば多分「そこまでの必要があるのか、ウチは外国語大学じゃありませんよ」、という声が出る可能性も高い。そんな中で専門教育の時間と内容に負担をかけない形で英語力を増進させる現実的かつ有効なカリキュラム上の政策はないのかどうかなのである。そこで浮かんでくるのがアジア圏からの医学教員の採用という案だ。英語で行う専門科目の授業を想定しての話である。あえて英米圏からではなくアジア圏を強調するところがポイントである。それを既存の教養枠内の英語授業とは別に専門教育内に取り入れる。繰り返すがこれは上級学年での専門科目を念頭に置いた案である。既に上の資料の一覧でもわかるように、アジア圏の大学では高等教育の段階では英語で教育を受け、英語で自分の専門領域に係ってきた研究者が少なくない。そんな彼らに来てもらい、医学の専門領域について「英語で」講義をしてもらい、「英語で」演習を担当してもらい、そして「英語で」教育にあたってもらおう。学生はいやおうなくそれ

### これからの医学英語教育を考える

ぞれの専門内容を英語で学ぶことになる。トータルに英語に晒されるわけだ。それも「自然な状態で」晒される。彼らアジアからの教員は高等教育レベルでの英語ネイティブと言ってもよい。幾つかの専門講座の幾つかの開講科目がそうするだけで違ってくる。本学でも中国や韓国などアジア圏を対象に学生の相互交流、教員の相互訪問のプログラムはあるが、あくまでも表敬訪問を含めた交流のレベルにとどまっている。教育・研究スタッフとして参加してもらおうシステムではない。ではこの案のどこが魅力的なのか。また「英語で」と言うなら、なぜ英米系ではなくてアジア系なのかという疑問も生じよう。それらも含めて以下もう少し述べてみたい。

### (3)

上記提案の現実性、すなわちアジア圏の医学研究者を(英語教育も視野に入れながら)教育スタッフとして

我が国の医学部で受け入れる可能性を考える際、ポイントは幾つかあるだろうが以下の4点にしばって大筋問題はあまい。すなわち

- ① 彼らの科学(医学)研究・教育レベルはどうか。
- ② 受け入れ側のコスト
- ③ 授業で使用されるアジア英語をどう考えるか
- ④ 期待される効果は何か

それぞれ簡単に以下見てゆきたい。

#### ① アジアの科学(医学)レベルはすでに高い

この地域の爆発的な人口増加と経済的發展に伴う今日のダイナミズムについてくどくど説明を加える必要はないだろう。一人当たりのGDP、アジアのトップはもうかなり以前から日本ではない。シンガポールと香港が日本の上を行っている。日本のすぐ後に韓国や台湾が迫ってきている。生産年齢人口の増加と経済發展の規模は概ね対応するとも言われるが、そのピーク

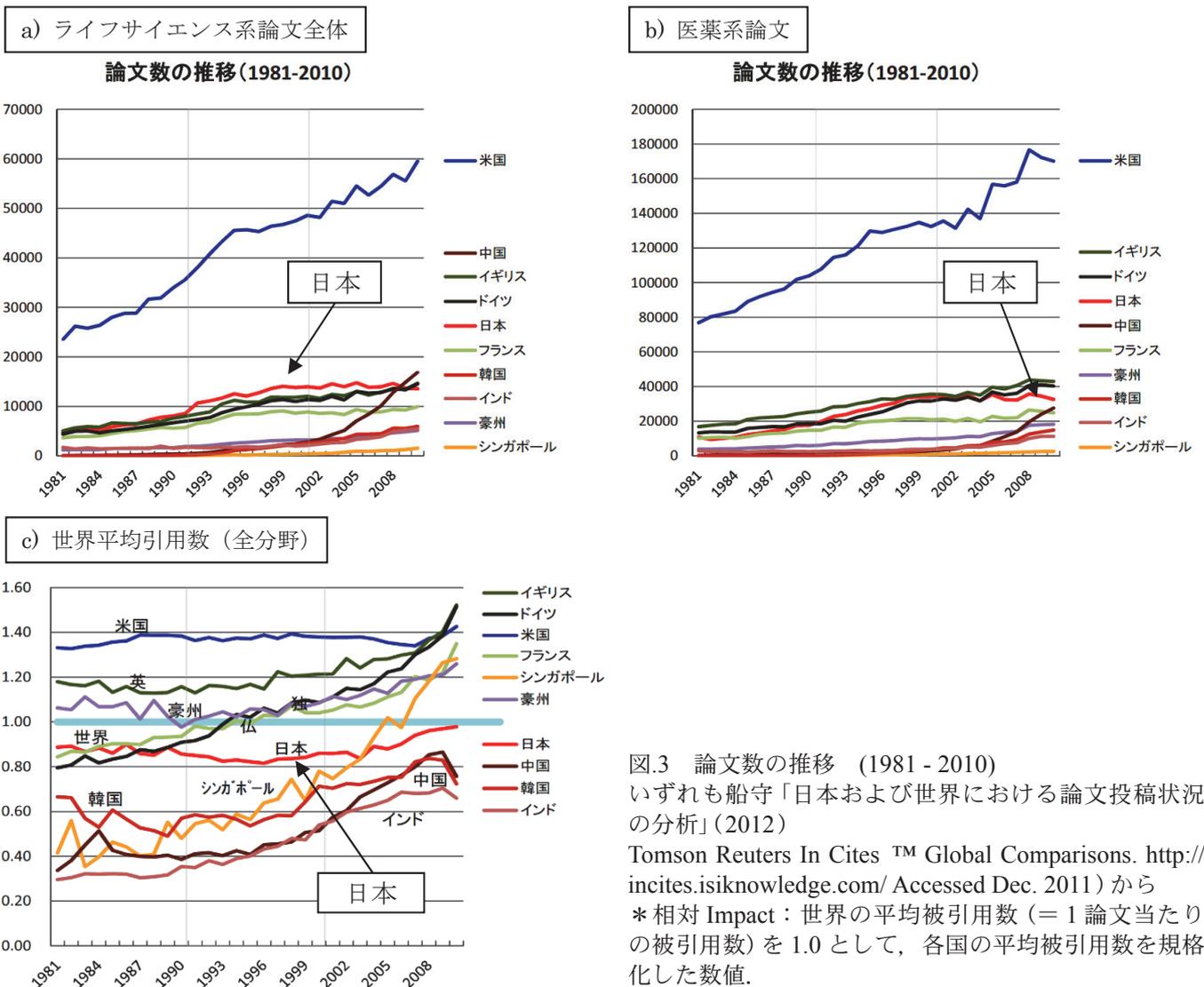


図.3 論文数の推移 (1981 - 2010)

いずれも船守「日本および世界における論文投稿状況の分析」(2012)

Tomson Reuters In Cites™ Global Comparisons. <http://incites.isiknowledge.com/> Accessed Dec. 2011) から

\* 相対 Impact: 世界の平均被引用数 (= 1 論文当たりの被引用数) を 1.0 として、各国の平均被引用数を規格化した数値。

森岡 伸

表3 医学分野論文ランキング(アジア 国/地域別)

## a) 論文数によるランキング

	Country	Documents	Citable documents	Citations	Self-Citations	Citations Per Documents	H index
1	China	63,441	59,359	26,212	12,423	0.41	274
2	Japan	36,115	31,508	16,311	4,790	0.45	458
3	India	23,264	19,091	7,079	2,328	0.3	216
4	South Korea	18,202	16,188	8,411	1,816	0.46	237
5	Taiwan	8,913	7,982	4,108	957	0.46	233
6	Singapore	3,650	3,217	3,122	479	0.86	206
7	Hong Kong	3,328	3,007	2,555	430	0.77	244
8	Malaysia	3,179	2,980	1,279	352	0.4	103
9	Thailand	2,978	2,650	1,480	266	0.5	170
10	Pakistan	2,797	2,563	1,034	263	0.37	101
11	Bangladesh	766	720	473	70	0.62	97
12	Indonesia	543	512	338	35	0.62	97
13	Viet Nam	519	477	380	47	0.73	104
14	Nepal	404	373	130	24	0.32	67
15	Phillines	394	357	276	18	0.7	102
16	Sri Lanka	369	337	207	22	0.56	74
17	Cambodia	150	132	115	28	0.77	55
18	Macao	147	142	82	18	0.56	27
19	Kazakhstan	129	123	70	8	0.54	31

## b) H index によるランキング

(H index: 被引用数が h 以上である論文が少なくとも h あることを示す数値 (h) の最大値. 論文の量 (論文数) と質 (被引用数) とを同時に示す指標の一つ。)

	Country	H index
2	Japan	458
1	China	274
7	Hong Kong	244
4	South Korea	237
5	Taiwan	233
3	India	216
6	Singapore	206
9	Thailand	170
13	Viet Nam	104
8	Malaysia	103
15	Phillines	102
10	Pakistan	101
11	Bangladesh	97
12	Indonesia	97
16	Sri Lanka	74
14	Nepal	67
17	Cambodia	55
22	Kazakhstan	31
26	Macao	27

(The SCImago Journal & Country Rank 2014 : >100 より作表)

## これからの医学英語教育を考える

にある（あるいはもう過ぎている？）のが中国だ。13億の大国である。さらにインド、アセアンの国々がそれに続いている。日本もかつてそうだったが、その豊かさのすそ野は当然ながら教育や学術研究へと広がってゆく。実際医学研究の質も上がってきていて、今や日本の研究機関に伍して医学教育・研究で競い合えるレベルの研究者も増えている。国際的な有力学術誌への投稿国別資料でもインド、シンガポール、中国などは目立った上昇を見せている。ざっとだけ資料を挙げておく。最新とまでは言えないが船守氏の「日本および世界における論文投稿状況の分析」（2012）から3点、これは分野を横断した総合的な学術力の指標として参考になる。（図3）それともう一つ、2014年の資料からアジア圏の医学分野に限定したもの。（表3）

以上の資料からだけでもこと医学についてアジア圏が健闘しているのがわかる。総じて日本人が目を向けているのは欧米の医学・医療であり、アジア圏の国々についての関心やイメージは決して高いとは言えないが、もう一つ別にこんなデータについても付記しておく。（JCI＝国際医療認定）（メチカルツーリズム）の2014年の評価統計のデータでは世界のトップ10に、マレーシア、シンガポール、インド、タイなどを含めてアジア圏から6つの国の医療施設がノミネートされている。判断基準の細部まではよくわからないがここでアジアの病院が多くランクインしている背景には温暖な気候で費用も安めという経済的・観光的な条件ももちろんあるのだろう。しかし肝心の医療技術が低くてはこういう評価に簡単につながらない。医学、医療における一定レベルの高さを示す証左と見て差支えあるまい。

### ② コストの問題。

この点はさして贅言を要しまい。一部を除いてアジア圏はまだ経済レベルにおいて日本に及ばず、その分生活費用も安く、また研究者や大学人の年俸もそれほど高くはない。手元のネット記事、2016年10月13日の「朝鮮日報日本語版」に大学教員の日韓における研究環境の差を取り上げたコラムが載っている。その中の数字によると日本の国立大の教授の平均年収は1172万円であり、対して韓国の教授全体のそれは876万円とある。経済力で日本にかなりまで迫っている韓国と比べてもまだ少しの差はあるようだ。他のアジア諸国ならこの差はもっと大きい。これは迎え入れる日本の側から見れば当然有利なファクターになる。日本は明治以来、まだ貧しくて学問の基礎がなかったころ、かなり無理をして欧米から教員を招いて教育、研究の充実を図った。最初は帝国大学などを中心に外国人教

員を雇い入れ、破格の待遇でもてなした。主に英、独、仏の国々であり、また日本人学生・研究者の留学先もそのような国々だった。第二次大戦後はアメリカの比重が増してゆく。

そうすることで学問レベルで少しでも彼らに追いつこうとしたのである。その名残はつい最近まで日本の大学にも残っていた。それらの国から研究者を受け入れ、一定期間仕事をしてもらい、何年かしたら帰ってもらうというシステムである。特別に外国人教員宿舎などを用意して迎える大学も多くあった。あきらかにそれは日本人教員の平均を超えた好待遇だったし、それだけの値があるとみての投資だったのである。さすがに現代では、そのような外国人教員を特別扱いするケースはなくなってきている。それだけ日本の学問、学術レベルが欧米の国々と肩を並べる（あるいは追い抜く）ところまで来た、ということだろう。

従ってアジアに顔を向けるということはこれまでのアプローチとは意味が違う。本来こちらにある有利な条件に応える形で優れた人材に来てもらうということであり、何の問題もない筈だ。生活の利便性、賃金、研究環境のレベルなど、どれを考えてもまだまだ日本はアジア圏の研究者にとって魅力を失っていない。だからこそ優秀な人材を求められる。特別待遇の必要もないのだ。文科省の資料をいちいち挙げて説明する必要はあるまい。語学などを含めアジア圏からの人文・社会学系の教員数は若干あるようだが、こと理系（医系）となると採用数は極めて少ない。上記①でも見たように、幾つかのアジアの国々での学術レベルは日本とほとんど遜色ないところまで来ているのに、である。日本側が有形、無形の様々なハードルを設けて彼らを教員候補としてさほど真剣に考えてない、ということだろう。こんな風に言えば、ただでさえ少ない日本の理系研究者ポストが近隣のアジア圏の研究者にまで侵食されるのか、という声も聞こえてきそう。そんな後ろ向きでなく、逆に若い（若くなくても構わないが）日本の研究者はもっと活躍の場を周辺のアジア諸国に求めてはいかがなものか。分野によって事情も違うだろうが、もっとアジア圏を視野に入れられないものか、と思う。「そんなこといったって英語で講義するのでしょ、自分たちの英語では英米系の研究者とはとても互角に勝負できない」と、そんなとき決まって出てくるのが英語の話である。情けない、と言いたいところだが、すこし誤解もあるようだ。日本人はもっと自分の英語に自信をもつべきだ。少なくともアジア圏の人々に対して日本人の英語は決して「ダメな英語」ではない。これは次の話にも繋がってゆく。

### ③ アジアの英語 — これからの英語の最大の担い手

②で述べたことにも関係してくるが、受け入れ側つまり日本が懸念を抱くものとして言語・文化面は小さくないかもしれない。すなわち仮にアジア圏からの人材の受け入れは学術レベル的にもコスト的にも大きな問題はないとしても言語・文化面はどうなのか、である。これまで欧米系の先進国から指導者を向かい入れていたという過去の長い歴史が身体に染み込んでいて意識の切り替えがなかなか出来ないのかもしれない。しかし仏教文化が主たる精神的支柱の一つを形成している場合が多い(インドネシアはイスラムだが)このアジア圏の場合もともと大きな違和感はない筈である。あとは、英語で講義をしてもらうとして彼らの英語は大丈夫なのか、という点だろう。日本の学生はついていけるのか。彼らの英語についての問題である。

これこそ心理的な面が意外と大きいかもしれない。そのことをちょっと考えてみよう。私たち今の日本人の頭には「英語＝英米英語」という固定観念が出来ている。私が子供の頃は「英語＝イギリス英語」だったが、現在は既に「英語＝アメリカ英語」の印象を受ける。確かにそう言えるようにも思うが、このパターンは不変だろうか。ここで少し振り返るが、そもそも英語(この場合イギリス英語だが)が国際共通言語の主役として登場してきたのは20世紀に入ってからである。19世紀から20世紀の頭ぐらいまでは英語、ドイツ語、フランス語が互いに一方的に譲ることなくほぼ近い影響力をもって国際通商、政治、学術の舞台で使用されていた。勿論英国は18,19世紀と、7つの海を支配した大英帝国時代の蓄積があり、その当時から英語の「世界語」としての将来について予想する人々は少なくなかった。しかし政治、経済的覇権に続いて国際語としての決定的<覇権>は少し遅れて現れる。それが20世紀である。そして20世紀に入って今述べたように頭ひとつ飛び出たイギリス英語が50年間ほど大きな影響力を見せつけた後、英語の主役がそのイギリス英語からアメリカ英語へと移ってゆく。その移行期が先ほども触れたように1960年代に入ったあたりからだ。これはアメリカが第二次世界大戦の戦勝国のなかで大きな役割を演じた後、まさに超大国として世界に君臨し始める時期に沿うようにして目立ってきた現象である。軍事、経済、政治、科学、すべてに渡ってアメリカが世界をリードし始めた時期と重なってくる。私事ながら私が大学に入学した1970年頃には「英語」と言えばもう、「イギリス英語」はすでに下降線に入り、「アメリカ英語」を念頭に浮かべる傾向が強くなっていったように思う。(ついでながら英語の後塵を拝するにいたっ

たとはいえフランス語、ドイツ語も今よりはまだ遥かに強力な第二外国語グループとして力を温存させていた。)つまり英語と一口に言ってもその中では主役の座を巡って担い手の盛衰はあるということ。現にイギリス英語からアメリカ英語への移行を我々は見てきている。繰り返すがイギリス英語が国際通商言語として顕著な影響力を示したのは20世紀の頭から中期までのたかだか50～60年程度なのである。そして今は英語と言えばアメリカ英語がその主役を担っている。それは今も続いているように見えるかもしれない。だが果たしてこの状態はいつまで続くのか、である。確かにアメリカ英語が英語のモデルとしてここ10年、20年の内に主役の座から降りそうなことを示す明確な予兆はない。多くの人々の実感も多分そうだろう。当面アメリカ英語は今の影響力を失わないだろう、と。

グラッドルというイギリスの言語学者が『英語の未来』という本を著したのは1997年である。<sup>v</sup>この種のテーマを扱った資料が少ないので貴重な文献の一つになっている。膨大なデータをもとに今から35年ぐらい先、すなわち2050年頃の英語の姿について予想を立てた一種の言語未来学だ。そのころ英語はどうなっているだろうか。英語の将来の地位に影響を及ぼすと思われる一連の要素を検証している。人口、経済、宗教、テクノロジー、文化の流動、グローバル化、ナショナリズムなど種々のファクターを取り上げながら読み解き、英語のこれからを論じる。断定的な口調は巧みに避けつつ、「相対的に」という但し書きを加えながらも、その頃(2050年頃)英語は国際共通言語の地位から脱落して色々ある国際言語のうちの一つになるだろう、と著者は示唆している。また別のイギリスの言語学者オスラーは違った角度から英語の国際共通言語としての将来には懐疑的だ。つまり自動翻訳のテクノロジーの発達やナショナリズムの台頭が世界共通言語の必要性を薄めるだろう、という。<sup>vi</sup>この問題は悩ましい。過去にラテン語、フランス語を含め世界共通の通商言語(リンガフランカ)と言えるような言語はいくつかあった。ただそれら大言語の国際性を保証したファクターの重さは歴史状況の変化に応じてその果たす役割も変わる。例えば昔のラテン語の場合、その国際言語化の道筋の背景にはローマ帝国の強大な軍事力が当然あったが、軍事力が衰えた後も、ラテン語は別の力つまりローマ・カトリック教会の宗教的な力のもとで、その後千年にわたって教育面での国際語として生き続けた。今の英語を取り巻いているファクターも今までで予想し得なかったような付加的関数がかこれらに加わる可能性は否定できない。現にグラッドルが掲げているよ

## これからの医学英語教育を考える

うな個々の未来学的なパラメータにしてもいかようにも変化する。立場によって色々な結論が引き出せるのである。それは自然科学的物理データのような決定的データではない。現に英語へのテクノロジーの「影響」について語ろうとしても、これは悲観的、楽観的を含めて立場によってまた見る人によって意見は違っている。不確定要素がついてまわり、なんとも断定しきれないのだ。従って私のような一介の英語教師には、英語そのものの未来というような「大予想」に立ち入ることは無謀でもあり、正直躊躇してしまう。

しかし、である。これからの時代どのような英語がその中心に来るかというテーマ、つまりその主要な「担い手」はどうなってゆくだらうか、という各論に話を絞るならば手元の資料なども参考にしてもう少し確かなイメージが描けるような気がする。そこで出てくるのが上でも述べたアジアの英語なのである。その前にまず英語の「現在」を次の図表で確認しておきたい。(図4) Kachru というインド出身の言語学者が整理した図である。この三つの同心円で世界英語の現状を説明できるという。この仕方が広く好評なのでここでも参考にしたい。簡単に言うと三つの同心円のうち真ん中の Inner Circle というのは元来が英語の国である。イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、南アフリカ、一部のカリブ諸国などだ。もともとイギリスから人々が移住して創った国々と言ってもよい。その外に来る Outer circle は主として英米の植民地の

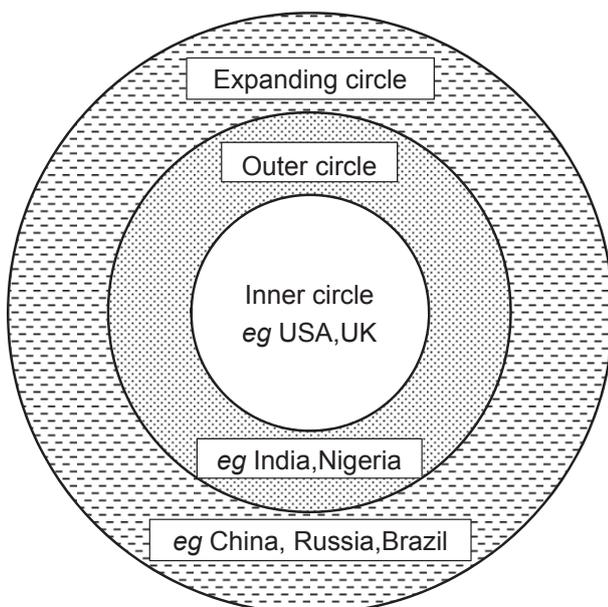


図.4 Braj Kachru's Three Circles of English. より作図

\*Inner circle = 3.8 億人程度

\*Outer circle = 3 億人程度

\*Expanding circle = 10 億人程度

時代を経て英語が根付いていったアジア、アフリカの国々。つまりインド、パキスタン、バングラデッシュ、シンガポール、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、ケニヤ、タンザニア、ナイジェリアなどがそれである。もちろんこれらの国々の全員が英語話者ということではない。しかし学校教育や行政、通商、政治でも広範囲に英語が使用されている。そして最後の外枠である Expanding circle は特に歴史的な背景はないものの国際通商の媒体として広く英語が使われている地域である。ヨーロッパの諸地域、インドネシア、エジプト、ブラジル、中国、ロシア、韓国、そして使用のレベルについて濃淡はあるにせよ日本もここに入る。Outer circle, Expanding circle についてはそれぞれ3億、10億と人数を記載してあるがこれは今も触れたようにその地域の人口のトータルではなく、そのうちの英語使用者と想定できる人々の大まかな数である。従ってこの図表からも言えるように Inner Circle の英語使用、すなわち「母語」としての英語使用者数がトータル4億人に満たないのに対して、その他の使用者が13億人に上るといった点が色々な意味で注目点だ。

この Inner Circle の顔ぶれを見れば、いずれも先進国グループに属すると見られる国々だが、生産年齢人口も経済活動も既に成長ラインから下降線へと入り、残念ながら国力のピークがもう過ぎた国々と言って差支えない。アメリカはかすかに人口の上昇ラインを維持しているが、内実はヒスパニック系の人々の人口増加であり、英語白人系は既に減少ラインに入っている。自然科学、情報テクノロジー、高等教育などの分野では今なお強い影響力を有するものの、経済力、そしてそれに連動する軍事、政治力、どれをとってもアメリカはもう最盛期から下り坂に入っている。それに対して、ここでの outer circle と expanding circle を合わせたアジア英語使用圏は、その急激な人口増加、爆発的な経済成長、それにあわせて様々な面で成長、発展を迎えている点は冒頭の方でも触れたので、あらためて強調はしない。そのことに疑問を挟む声はあるまい。その点に注目すれば次のように言ってもおかしくない。つまり、世界の英語の中に占めるアメリカ英語(イギリス英語と共に)はやはり相対的にプレゼンスを落としてゆく。と同時にアジア英語はこれからはつきり発言力あるいは影響力を増してゆく。トータルな意味での国力を増してゆくわけだから使用言語についてもそれはごく自然な現象と言える。自分たちの英語について権益を主張し始めるわけだ。それは非現実的なことではない。例えばアセアン10カ国をつなぐ共通通商外交言語は英語である。そして肝心なのはその英

語は英米系の英語ではなくアジアの英語である点に注意したい。これらの国と国の間を結ぶ活発な経済(通商)活動を支える媒体言語はアジア英語ということになる。<sup>vii</sup> マーク・エイブリーというカナダのジャーナリストがこれほどまでにグローバル化した英語の実態を見てみようとして世界中を歩き回り「英語の今」について生き生きと活写したルポルタージュを6年前に出版した。日本英語についても1章を割いていて興味深い書だが、その中でこう言っている。

"Given the sheer number of people in the region and the tigerish leap of their economies, it's possible that far in the future, Standard English will reflect an Asian norm rather than an Anglo-American one."<sup>viii</sup>

控えめな印象というべきだろう。逆に言えば日本はいやが上でもアジア英語と付き合ってゆく時代が来つつある。つまり我々が英語を使用する場面は英米系白人とよりもアジア系英語話者を相手とする場面がこれからずっと増えてゆくということ、この流れは避けられないということなのだ。

彼らの英語は、確かに地域的文化的特性を持っている。音声面でも統語面でも、あるいは文法や語彙の面でもそれはある。その細部の特徴に今は立入れないが、ただそういう英語を彼らは親しみとプライドをもって使っている。インド英語もフィリピン英語も旧宗主国のイギリス英語、アメリカ英語の影響を受けてはいるものの、彼らはモデルとなる英語をイギリス英語、アメリカ英語に設定して、それを目標にしているわけではない。自分たちの英語を肯定し、その英語使用に自信をもっている。不完全な英語を使っているという意識はない。これは英語学習にあたって日本人も留意すべきところである。日本人は英語学習においてあくまでも英米英語を当然の規範、前提として捉え、自分の英語への自己否定意識が最も高いという調査結果がでている。<sup>ix</sup> (「<アジア英語>学会」が日本では設立されていて、そこにはアジア圏の英語研究者が広く参加してアジア英語の個別性と同時に共通性の可能性が調査、議論されている。こういう活動が「アジア英語」の共通認識の醸成に繋がっていくことが期待される。)

それともう一つ、今の話と連動してくる点だがアジアという域内では英米英語よりはアジア英語の方が理解されやすいのも否定できない現実だ。タイではアメリカ英語よりインドネシア英語やマレーシア英語の方が通じやすいし、フィリピンではイギリス英語よりもシンガポール英語や台湾英語の方が通じやすい。

これは体験した方なら容易にわかることだろう。典型的なアメリカ英語は一步外に出れば意外と聞き取りづらい英語でもある。ラリー・スミスとセシル・ネルソン教授の調査によれば、アメリカ人の英語はアジアの人々に対して伝達率は決して高くないのに対して日本人の英語は高い伝達率があるという調査結果が示されている。<sup>x</sup> 我々も日本人風にしゃべる方がタイや中国やインドでは通じやすいことを体験的に知っている。英語がこれだけ世界に広がった結果として否応なく多様性が生まれ、英語はもはやアメリカやイギリスだけの専有物ではなくなってしまった。以前から言われていることだが Englishes の時代である。そのことがアジア圏におけるアジア英語の肯定的な受容へと繋がっている。それぞれの国が自分たちの英語について権益を主張し始める背景にもそれが一つある。近年とみにフィリピンやマレーシアが英語語学留学プログラムの提供地として自国の英語教育機関を対外的に宣伝しているのはインターネットを利用している人たちならご存知だろう。「英米英語」を英語の基本モデルとして誰もが考えていた時代ならありそうもない現象である。繰り返すが、自分たちの英語を本物の基準から外れた二次的な英語と見るのではなく、英語全体を構成するなかの無視できないメンバーとして認識しつつある。「英語」について考える時、そのような台頭するアジアの英語に向き合ってゆく心構えが必要になってくる。

#### ④ 教育的効果

この場合日本人学習者の側の心的特性を考慮に入れなくては「己を知る」ことにならない。シャイであり几帳面である、完璧主義のところもある。歴史的、風土的にもそれは根深い。そして今なお以心伝心の文化を持っている。これは文化心理学とでもいうべき領域で扱うテーマかもしれない。しかしなにもその方面の専門家の資料をあれこれ挙げずとも我々自身が日常的に体感していることである。シャイは深刻化すると対人不安と呼ばれるようになるし、極度に進むと対人恐怖となって厄介である。これまで多くのクラスを持ってきた私自身の経験から見ても、つくづく日本人はコミュニケーションにおいて奥ゆかしくて控えめだ、と思う。それが場合によっては自意識の過剰を伴い、外国語学習に支障をきたすケースが多いのも容易に納得できる。<sup>xi</sup> 普段の行動の評価では、日本人は大人しくて丁寧だと肯定的に済ませても、こと言語学習になればそう決め込んで安心してもらえない。目指すべき英語モデルを厳格に固定してしまい、それに届かない自分を卑下してしまう。多くの人によって何度も指摘さ

## これからの医学英語教育を考える

れている点だ。歴史的な経緯や世界のパワーバランスの背景なども重なって、現代英語の規範は「アメリカ英語」（あるいは英米英語）だと決めつけてしまう。程度問題とはいえ、これも度が過ぎると本来のびのびとあるべき英語使用を必要以上に縛ることになる。そんな行き過ぎを矯正し緩和してくれるものはないだろうか。もしあるとしたら、それはアジア圏の英語話者の存在ではないか、と私は常々考えている。すなわち本学のような医学教育という文脈で言うなら英語で医学しているアジア圏の研究者達の活用である。先ほど参考にしたコラムにもあったがアジア圏の学生に接するとわかる。実に物怖じせずナチュラルに英語で話す。質問をし、議論をする。彼らにはコミュニケーション訓練のマイナス面に直結するような日本人的シャイな側面、完璧主義がない。外国語使用者としての自然な構えを身に着けている。文化の違いと言ってしまえばそれまでだが、同じアジアの人間なのに、である。だからこそまた彼らから学ぶ意味がある。

逆に言えばこうも言える。欧米のネイティブの英語話者を前にすると多くの日本人（の若者）は本来の真面目で几帳面な心的特性が頭をもたげてくる。やはり「英語＝英米英語＝規範モデル」が意識にあるのだろうか。欧米文化への劣等意識もまだあるのかもしれない。また悩ましいことに、匠の文化が根強く支配する日本人には何であれその道の専門家には敬意を払うという「美德」がある。その道の本家の話には一步下がってお話を覗く、というパターンである。だから英語使用の実践になると＜本場英語＞の体現者たる英米人の前では受け身になり、緊張し、場合によっては委縮してしまう。もちろんこれも個人差があって、そのような感覚から自由な人もいる。しかし日本人の場合その割合は決して高いとは言えない。委縮とまでいかなくとも多少遠慮の気持ちが働いて畏まってしまう。<sup>xii</sup> それ＜沈黙＞をもたらし、英語コミュニケーション学習にとっては必ずしも良い訓練環境につながらない。英語のクラスでこれまで何度も見てきたシーンであり、また何度も言われてきたことだ。だから欧米ではなく近いアジア圏の研究者に日常的に英語で接することで、日本人の英語学習の姿勢の欠けた部分が自覚され、そのことで緩和され、もっとのびのびした英語使用の学習環境に身を置くことができる。日本人に特有とみられる心的負荷の低減という点からみてもこれは好ましい方向性なのだ。発言し、受け答え、考え、それを繰り返す、というコミュニケーション自体のベーシックな教育という点での改善にもつながる。それは医学の専門領域で英語話者としてのアジア圏研究者を受け入

れる際に伴う副次効果だろう。アジア英語に目を向ける所以の一つでもある。

## まとめ

以下二点を強調して終わりとしたい。

### \* 基礎レベル(教養教育)は英米英語で鍛える。

本論の主旨を効果的に伝えようとするあまり「英米英語」の重要性にさほど触れていないきらいはある。もちろん私はその重要性を軽く見るつもりはない。あるレベルで「英米英語」が今なお世界英語の中心をしめているのは否定できないし、書記英語を念頭に入れるならなおその感はある。これまでのとりわけ近代の学術遺産の多くが英米書記英語の中に蓄積されているからだ。最先端の科学ジャーナルの場合、英語は投稿者、レフリーも含めて英米英語使用者がなお相当の割合を占めている。「これまで」と「今」の英語の現実を反映していよう。英米英語を介して行われる情報の交換量はいまだ多い。また医療先進国の米、英との係わりを考えればそこで使われる英語を無視できる筈はない。その意味では医系大学の教養教育で英語の担当教員が英米のネイティブ、もしくは英米英語で英語の訓練を積んだ日本人教員が担当することは問題ないと思う。当面はそのような状態が続くだろう。しかしこれまで述べてきた様に私がここで強調したいのは、それに新たにもう一つ付け加えてこそ医学英語教育は十分な実を結ぶのではないか、ということだ。つまり、

### \* 応用レベル(専門課程)は「アジア英語」を受け入れる。

「これから」は英米英語とアジア英語が並走する時代に入る。英米英語に敬意を表しつつ、しかし運用面ではその規範を過度に厳格化することなく、世界の大きな流れにもっとリセプティヴでありたい。世界的な英語の多様化と拡大の中で「英米英語」も英語という全体のなかの一部になってゆく。そんな中でアジア英語使用圏の国々の活力を専門領域だけでなく医学英語教育レベルで取り込むことは日本にとっても自然なことだ。これら国々の理系分野の発展と成長については既に述べた。彼らの中から優秀な人材を募り、教育スタッフに加わってもらう。コミュニケーション学習効果として、つまり英語学習環境の強化という点においても日本人学生にはまちがいなく有意義である。学生諸君に英語の＜幅＞も同時に体感してもらうのがポイントである。「日本人も、こんな風に英語で議論し話せばいいんだな。」と学んでもらう。「英語(で)」専門を学ぶ練習を並行して積み上げてゆくことが、英語のトータルな身体化をもたらす。例えば基礎医学の幾つかの講座

に4, 5名のアジア圏からの教員が加わるとしよう。集中講義からスタートしても良い。特任教員でもよい。あるいは5年間の時限付採用でも構わない。週に2回, 3回と英語による彼らの講義、演習が入ってくる。多分今より「話せる」ようになるし、そして「ここが何より大事なのだが」今より「話そうとする」ようになる。その効果は大きい筈だ。自分の英語運用への意識も変わってゆくだろう。

### 注

- i. このエッセイは、平成28年3月の私の最終講義「アジアの英語と日本の医学英語教育」を加筆ならびに修正したものである。当初パブリッシュすることは頭になかった。正直、皆さんの前で<お話し>すればそれで儀式は終了、と決め込んでいた感がある。そんな私に対して「先生、あの最終講義はしゃべりっぱなしで終わりですか？」と刺激的な言葉で翻意を促し、このような形に巧みに誘導してくれた編集委員長の鈴木健史氏には感謝の気持ちを伝えたい。
  - ii. なら韓国も「ハングル漢字混合スタイル」の復活を考えればよいのでは、と傍目には見えるかもしれないがそう簡単ではないようだ。言語はそれぞれの国にそれぞれの事情がある。豊田有恒『韓国が漢字を復活できない理由』(祥伝社新書、2015)によれば漢字の公式な復活は日本統治時代の和製漢語の復活に繋がるのは必至で、それは彼らの望むところではない、という。
  - iii. 身近なところで思い出すのは札幌農学校時代の教育である。新渡戸稲造はじめ英語に抜群の能力を見せる卒業生をこの時期輩出しているが、当時は外国人教育者によって教育のすべてが英語で行われていた。今で言うイマージョン教育の高等教育版である。
  - iv. 篠原久典、「科学と語学力」(中日新聞夕刊コラム「紙つぶて」)、平成24年4月19(木曜)から。
  - v. David Graddol, *The Future of English* (British Council, 1997), 山岸勝栄訳『英語の未来』(研究社、1999)。
  - vi. Nicholas Osler, *The Last Lingua Franca* (Penguin, 2011) を参照。これからの自動翻訳の未来と英語の関係については英語学者の D. Crystal も述べているが、彼の判断はやや慎重である。 *English as A Global Language* (Cambridge Univ. Press, 1997), 国広正雄訳「地球語としての英語」(みすず書房、1998)、35-6 頁を参照。「地球語の存在が国際的な
- 翻訳サービスの需要をなくしてしまうのか、それとも自動翻訳のコストが地球言語習得のコストをはるかに下回るようになった結果、後者が無用の長物化してしまうかのせめぎ合いとなるのか、これは見ものである。百年後の、これは興味深い争い、といえる。」しかし恐らく百年も待たずとも結果は出るだろう。
- vii. Andy Kirkpatrick, *English as A Lingua Franca in Asean* (Hong Kong Univ. Press, 2010) のうち特に Part I: Asean and English が参考になった。
  - viii. Mark Abley, *The Prodigal Tongue* (Arrow Books, 2009), p.76. この書には(学者の書いたものと違い)ジャーナリストの嗅覚のようなものが溢れている。
  - ix. 本名信行(編)『最新アジア英語事情』(大修館、2002)はアジア圏の国々の英語の姿と英語教育事情を丁寧に紹介している。河添恵子『アジア英語教育最前線』(三修社、2005)も英語教育にとどまらずそれぞれの国の教育事情全般もカバーしていて参考になる。
  - x. Larry E. Smith and Cecil L. Nelson, “World Englishes and Issues of Intelligibility” *The Handbook of World Englishes* edited by Braj B. Kachru, Yamuna Kachru, and Cecil L. Nelson (2006, Wiley-Blackwell), pp.428-45. 参照。一般的な書を追加するならグレン・サリヴァンというアメリカ人翻訳家の『日本人英語のすすめ』(講談社、1993)も面白い。日本人英語を例にあげながらインド旅行をした際にアメリカ英語が通じづらくて、はるかに日本人英語の方が通じやすかった点を紹介している。特に45~48頁を参照。
  - xi. 日本人の自分達の英語への低い評価については寺沢拓敬『「日本人の英語」の社会学』(研究社、2013)の特に第三章、七章を参照。
  - xii. 10年ほど前になるが、S. マーフィー重松という英語教師が異文化間コミュニケーションに伴う心理的負荷を念頭に『英語が話せる日本人、話せない日本人』(泉書房、2004)という肩の凝らない本を出した。様々な英語教育法にもまして留意すべき日本人の心理的壁に触れていて興味深いが、特に冒頭2ページに挙げられている東大教授の話は示唆的である。その教授は、英米人の前に出ると英語がなめらかに口に出てこないが、アジア系の人々とは不思議なくらいスムーズに話せる、という談。